

食性の研究二、三

1. Hobby, B. A. (1932) A study of the prey of *Dioctria rufipes* DeG. (Dip. Asilidae) in an Oxford community. *J. of animal ecology*, vol. 1. pp. 77—82.
2. Pentelow, F.T.K. (1932) The food of the Brown trout (*Salmo trutta* L.) *J. of animal ecology*. vol. 1. pp. 101—107.
3. Stack, H. D. (1936) The food of caddis Fly (Trichoptera) larvae. *J. of animal ecology*, vol. 5. pp. 105—115.

1. ある捕食性昆虫がどんな虫を食うかは、主として、その虫の（1）形態（2）狩りの方法（3）その虫が棲んでいる場所の動物相および（4）選り食いするかどうかによって定まるとまず書いて、*Dioctria rufipes* DeG. なるムシヒキアブではどうであるかを Oxford 大学の校庭で 1931年 6月 4日～12日 調べた報告である。

88匹のこの虫の獲物（表示）と以前に報告された食物（表示）とにより次のごとく結論している。

結論（1）これらの獲物が主として厚い外皮をもち、中ぐらいの大きさの昆虫であるのは、この虫の口器と狩りに使う脚の構造によるものであろう。

（2）獲物は 5目、21科、42属、49種にわたっており、1種1個体の場合が36回、2個体—7、3個体—1、4個体—2、6個体—1、7個体—1、13個体—1である。最後の種類は、このあたりで最も多いものの一つらしいことと、以前に報告された獲物との共通は1種のみであることから、生物相および棲息数の多少が獲物に反映しているし、選り好みもないように思われるが、姫蜂だけは好んで狩る。

（3）従来ムシヒキアブについていわれているように、これもまた、その性別

によって捕食の度合いが違ふ。すなわち、57♀♀、31♂♂であった。

著者は調査を行なった場所の動物相については、量的に調べた結果からいっているのではないらしいし、それらの動物の外皮、大きさその他の諸属性も観てはいないらしい。また、この調査が行われた場所、時期における、この虫の雄雌の数も調べてはいないらしい。

2. *Salmo trutta* L. なるニジマスの食性の研究である。Tees 河および Itchen 河の2つの河で別々に4月から9月まで、釣師から得た合計133個の胃の内容を調べたものである。

(1) 食物は分類学的に見て、魚類、昆虫類、甲殻類、貧毛類その他であるが、大部分は昆虫類である(表示)。2河を比較すると、食物の分類学的構成が違い、最も多く食われていた動物も違っている。すなわち Tees 河では①裸身の毛翅目幼虫 ②双翅目成虫 ③毛翅目成虫の順であるが、Itchen 河では①トビムシ *Gammarus* ②鞘をそなえた毛翅目幼虫③毛翅目成虫であった(表示)。

(2) 獲物を水棲か気棲かによって分類すると、いずれをも食っているのであるが、両者をまぜこぜに食っていた個体が最も多かった。この点では2つの河で相違は見られない(表示)。しかし、月別にすると、両者の割合が違い、4月には両者まぜこぜに食った個体が、8月には水棲のもののみを食っていた個体が一番多かった。

(3) かくて、この魚は口に合う大きさのものであれば、分類学上の位置、水棲、気棲のいずれをも問わず、選り好みせず食う肉食性である。ある河のある時期におけるこの魚の食物は、その時のその河中、および付近の動物相によって限られ、最も普通な食物は、それを囲む動物相のうち、最も多数のものであると結論している。

この報告でも動物相は別段調査されなかったようである。

3. この報告は、12種類の毛翅目幼虫の食性を調べ、それと分類学上の位置、身体各部の構造との間に関連ありや否やを調べたものである。

ある程度までその生物相を明らかにした Tees 河からの各種類5ないし20匹の(合計136匹)幼虫の胃の内容を調べて、肉食性(1)、雑食性(6ないし8)

草食性（3ないし5）にわけた（胃内容表示）。雑食性のものにはいろいろの割合が見られた。

分類学上の位置との関係。Martynov は毛翅目を *Annulipalpia*, *Integripalpia* の亜目に分け、主として前者は肉食性、後者は草食性であるとしたが、この調査では半数が合致しなかった。

身体各部の構造。剛毛のブラシが両大顎上にある時は草食、左のみにある時は雑食、いずれにもなければ肉食であるという Silfvenius の説には少なくとも7種が合致しないことを図示した。

Wesenburg-Lund は眼の位置（頭部の前方にあれば肉食、後方にあれば草食）を問題にするが、合致するものは2種のみで他のものは中央付近に位置している（図示）。著者はさらに、大顎の形、頭幅と前額長との比を問題にして見たが、これらも厳密に合致しなかった。そこで結論として、分類学上の位置および身体各部の構造は広範囲内で食性と関連があるといえるに過ぎないとした。

